

新刊  
紹介

For some in ancient books delight;  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth  
Not to be thought expert in both.

住谷悦治著

『ラーネッド博士伝』

——人と思想——

（未来社、A 5 判  
一、〇一三頁、七、〇〇〇円）

われらの同志社は、創立百周年の記念すべき時期を迎えるにあたり、その伝統を顧み、未来を展望する糧としようとしている。そのとき、ここに同志社総長住谷悦治博士の一千頁を超える大著『ラーネッド博士伝——人と思想』（未来社版）を手にして、同志社の学風形成に巨峰の重きを為すこの

大先輩の生涯を学び、重厚にして至純、誠実にして冷靜、ただ黙々とキリスト教主義大学の親柱を積み上げたこの哲人的風格の人物の存在無くしては、熱情無比の新島襄先生の同志社立学の大業も成り得なかったという、深い感懷を抱かしめられる。

本書は、「博士の教師として、学者として、また人格において、わたくしがただならぬ尊敬と思慕を懷いている」と述懐される住谷総長のラーネッド博士への至愛の情によって綴られている。「友とは、二つの関係に宿れる一つの魂である」（アリストテレス）というが、日ごろ私のみる住谷氏の人となりとその思想には、同志社人のなかでも他に比類無く、ラーネッド博士と人格の波長を共にするもののあることを感ずる。その筆になることによって、この『ラーネッド博士伝』は、損なうことなくその全貌を伝え、売名浮薄の時流に抗して、同志社が地味にして着実に、われらに真の自由を得せしめる真理の大道に向って、団結闊歩する必要があることを教えている。

近年、学内騒然、同志社の第二世紀を展望し設計する叡知を養ういとまをもたず、

物事の潮どきをわきまえぬかに見える沈滞のなかで、いまこの『ラーネッド博士伝』の出版に接し、同志社真髓を確認すべき好適の書を与えられたことに、格別のよろこびを覚える。

住谷氏の感動的な言葉、「序論は同時に結論であり、結論はまた序論の意味を有つ。はじまりは終りであり、終りのはじまりである。」（三八頁）同志社の将来、永遠の発展に備えるに当たって、まことにわれらは、同志社創成期の開拓者たちが、同志社の学風形成のために果たした「序論」的役割を明察、反芻しなければならぬ。

住谷氏の詳細な解説を得て、ラーネッド博士が、神信仰への自由、キリスト教社会の組織の自由、思想の自由の三つの自由確立をめざして、新島襄先生を助けるべく同志社に馳せ参じ、維新期の荒武者のごとくに粗豪傲慢の学生たちにも、「不適不平のみ多く、何一つ満足したことはなかった。斯かる際に当たって、私共が最も尊敬して居つたのは、独りラーネッド教授であつた」（山崎弘道と言わしめる充実した働らきを展開された事情を、手にとるごとく知る

ことができる。口のわるい徳富蘇峯も、「先生は規律そのものであり、能率そのものであり、精勵恪勤そのものである。……信仰を銜はざるも、信仰の人だ。先生の外皮には、清教徒的の硬質もある、その外皮を剥けば、真の愛の宗教を解得する基督者だ」と驚嘆し、外人教師敬遠の蘇峯をも、「只先生の教場には、心からの愉快を以って出席した」と述懐せしめている。また

「先生の博識は、何人も異論なき所、然も人の先生に質問する毎に、アイ・ドント・ノーと答えた。アイ・ドント・ノーは先生の綽号となった程だ」とも書き記させている。本書には、謙虚誠実のラーネッド博士の声も現し身も其処らにある想いをもつて、その解説の頁を繕かせてゆく。

経済学者、社会思想家としての博識の住谷氏が、ラーネッド博士の経済学、政治学について、その諸著述を丹念に紹介し、日本経済学史並びに社会思想史上の地位と意義を論ぜられるところは、住谷氏ならではの独壇場であり、ラーネッド門下から深井英五、浮田和民、留岡幸助、安部磯雄等々の傑出した人物を世に送ったのみならず、

小崎弘道、海老名弾正のように、信仰と社会生活を統一する自由思想家を輩出した同志社神学の源泉の、いずこにあるかをも明示して剰すところがない。

普通、伝記には自叙伝と他者即ち伝記作家による一個人の生涯の伝記とが含まれる。自画像には、内面の真実の噴出する独自の強味があるが、時として客観性の欠如を免れない。伝記作家は、人生行路に沿う鏡のごとくに客観的姿を映しとうとするが、それを愛着する筆者の主観的評価に味付けされることによって、その陰影法に浮き彫りにされた肖像画の面白味をもつ。

それに較べて、歴史家は組上に載せる対象の生成・変化をその史実過程の客観性に即して、その厳密さを求める点では、伝記作家の緻密性に劣らないが、しかも歴史家が単なる伝記作家で終り得ないのは、その客観的に年代順に生起する事件を、社会法則、歴史法則の基盤の上で、整理し、批判し、社会発展の法則に照らして評価することを、全叙述の大眼目とするからである。

単なる伝記作家とは違ふ歴史家としての科学的任務こそ、住谷氏の固有の境地に属す

るものと言わなければならぬ。

本書は、何よりも住谷氏のラーネッド博士への無比の敬慕に出發し、その身辺のさまざまな資料は、紙きれ一つも大切に集録し、いささかの重複も恐れるところではない伝記作家の態度を含む。

しかし住谷氏の独自の貫禄は、社会科学者としての歴史的叙述の手堅さにある。同志社総長としての激務のなから生まれたこの「ラーネッド博士伝」の鋭い分析と批判とを通して、ここに同志社第二世紀への明確な指針を読み込もうとするのは、ひとり私のみのことであらうか。

(嶋田啓一郎・大学文学部教授)

Ch・I・グリックスバーグ著  
店村新次・楠木美和子訳

### 『20世紀文学における悲劇の世界像』

法律文化社、B6判  
二七五頁、一、六〇〇円

悲劇の世界像は二十世紀ではもう成立しないという説が支配的になってきてい

る。かつて、ギリシアの舞台で活躍した「人間」はその高貴性偉大性神秘性を失い、現代では無に等しい一個の有機体に低下してしまった。掲げられていた正義にかわって、政治やイデオロギーや利益が優先してくる。姿なく世界を支配していた神々は既に滅び、歴史の心然という論理が指導権を握る。かようにしてギリシア悲劇の土台となった世界観が失われた以上、もう悲劇も不可能という主張が強くなってきている。

さて、著者はこの世界観の変化を認めながらも、古代悲劇と共通した精神的要素を現代の作品の中に見出していく。それを実存主義・不条理の作家たちにおいて認識することによって、現代のニヒリズムの文学こそが悲劇性を生み出す土台であることを確認し主張するのである。

著者によれば、これらの作家たちは人間や人生に対して否定と肯定の世界観を両つながら保持している。このことを著者は「悲劇的アイロニー」「悲劇的パラドックス」と呼ぶ。彼らは人間は無に等しい存在であるという認識から出發し、それゆえに無と対決していかに生きるかを求め、無意

味な人生に意味を与えようとし、絶望的な闘いを挑むのである。キルケゴールは不安と絶望と死という虚無の地獄へ現代人を案内した。ニーチェは存在のあらゆる恐怖と対決することによって人生を肯定しようとした。カフカの文学は無を克服し、新しい力の秘密を発見しようとする絶望的な試みであった。ヤスパースが述べているように、意味ある人生を生きようとするば、どうしてもニヒリズムの砂漠を通らねばならないのである。この精神的態度を悲劇性へと高めたのはカミュとサルトルであり、無意味な人生を有意義なものに変えるのは自由という選択権を持つ人間の努力であり、その努力は無駄と知っていてもやりぬくべき責任が人間にあるという主張である。ここに古代悲劇に現れた正義と人間性の高貴と偉大が再び輝いてくるのであり、虚無の地獄に落ちた現代人が再び神に似たものとして高められるのである。

更に著者は現代諸科学と悲劇の世界像との関係を論じているが、自然科学の進歩は人間存在の無意味さを確認させることによってニヒリズム文学の勝利をもたらし、そ

れが悲劇的世界像の土台となった。精神分析学はハイディッガーの実存分析の模範となり、またアメリカの悲劇作家に大きな影響を与えた。マルクシズムについては「人間の深淵はパンや美服で埋めることは出来ず、不協和音をインスターのリズムで解決出来ない」というG・ベンの言葉を引用して、経済的決定論や楽観主義は悲劇と全く無関係と切り切っている。しかし、革命の闘士の中に自己の自由な決定に責任を持つ人間としての悲劇的英雄像をみており、サルトル、カミュの作品が引用、説明されている。

更に、中国革命をテーマにしたマルローの作品の中に悲劇的世界像の理想にもっとも近いものを見る。「登人物物は絶望のうちに不条理な運命に突き進む。絶望が彼らをうちのめしながら反抗にかりたてる。結局失敗するのだが、その反抗はつかの間のものであっても人間精神の勝利という幻想を与えてくれる。」これが著者がもっとも言いたかったことのひとつと思われる。

(竹部琳昌・大学工学部教授)